

— 県立単位制高校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

上野遺跡群

～矢取坂地区～

2010

大分県教育庁埋蔵文化財センター

序 文

本書は、大分県教育委員会が設置する県立爽風館高等学校の建設工事に伴って、埋蔵文化財センターが発掘調査を行った上野遺跡群（矢取坂地区）の調査報告書です。

大分平野を望む上野丘陵は、古来豊後の中核的施設が建設された枢要地です。古代には国衙に関係する建物が、その後中世になると豊後国主の大夫氏により館が築かれました。このような歴史的な地である上野丘陵の一角に、大分県で初めての単位制高校が設置されるようになり、発掘調査を行うことになったものです。

調査では、古代の建物跡などが確認されました。これらの歴史的な位置づけについては周辺部の調査を待たねばなりません。いずれにしても古代豊後国の枢要地区での遺跡であり、ここに数棟の掘立柱建物群が存在したことは、何らかの歴史的意義を感じずにはおられません。

遺跡の上に建てられた平成22年4月からスタートする爽風館高等学校の今後の発展とともに、この調査成果が郷土の歴史の解明につながることを強く願うものであります。

最後に今回の調査に御協力をいただいた多くの方々に、厚く御礼申し上げます。

平成22年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター
所 長 佐 藤 英 一

例 言

- 1 本書は大分県教育庁学校施設課（当時）の依頼を受け実施した、「上野遺跡群（矢取坂地区）」の調査報告書である。
- 2 調査は県立単位制高校建設工事に伴って平成20年度に実施した。
- 3 調査は、工事の関係から2回（A区、B区）に分けて実施し、それぞれ県職員の管理のもと、下記業務を九州文化財総合研究所（A区）、（株）埋蔵文化財サポートシステム（B区）に委託して実施した。
 - 事前準備
 - 表土除去
 - 写真撮影（空中写真撮影含む）
 - 測量作業
 - 遺構掘削
 - 現場安全管理等
- 4 遺構の標記は下記の通りである。
 - SD（溝）、SK（土坑）、S（性格不明遺構）
- 5 出土遺物は、すべて大分県教育庁埋蔵文化財センターで保管している。
- 6 本書の執筆・編集は小柳和宏（埋蔵文化財センター）が行った。

目 次

序 文	
例 言	
第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査組織の構成	1
第2章 遺跡の立地と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	5
第1節 遺跡の概要	5
第2節 A区の遺構と遺物	7
第3節 B区の遺構と遺物	13
第4章 総括	18
写真図版	
報告書抄録	

【挿図目次】

第1図 遺物の位置と周辺の遺跡	4
第2図 調査区位置図	5
第3図 土層断面図	6
第4図 A区遺構配置図	7
第5図 第1号堀立柱建物	8
第6図 第2号堀立柱建物	8
第7図 第3号堀立柱建物	9
第8図 第1号土坑	10
第9図 A区出土遺物(1)	11
第10図 A区出土遺物(2)	12
第11図 B区遺構配置図	13
第12図 第1号堀立柱建物	14
第13図 第2号堀立柱建物	14
第14図 第1号土坑	15
第15図 第2号土坑	15
第16図 第1号土坑出土遺物	16
第17図 B区2号土坑・その他の出土遺物	17

【 図 版 目 次 】

- 図版 1 A区西側完掘状況（南から）
A区東側完掘状況（南から）
- 図版 2 B区南調査区完掘状況（北から）
B区北調査区完掘状況（西から）
- 図版 3 A区第 1 号掘立柱建物
A区第 2 号掘立柱建物
A区第 3 号掘立柱建物
- 図版 4 A区第 1 号土坑
B区第 1 号掘立柱建物
B区第 2 号掘立柱建物
- 図版 5 B区第 1 号土坑
B区第 2 号土坑堆積状況
B区第 2 号土坑
- 図版 6 出土遺物

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

大分県では単位制高校の建設が急がれており、建設場所が上野丘陵に決まったのは平成18年のことであった。その地は、企業局の官舎が立ち並んでおり、特にB区については大きく削平されていると考えられていた。しかし、平成19年7月と平成20年2月に試掘調査を実施したところ、後にA区、B区とした2箇所から遺構と遺物が出土したことから、本調査を実施することになった。

本調査は官舎の移転等の工事計画と調整が必要であったため、2回に分けて実施することになった。

第2節 調査の経過

調査経過については以下のとおりである。

A区

- 平成20年 6月 5日 調査開始、東区表土剥ぎ
- 6月10日 遺構検出写真
- 6月13日 遺構掘下げ開始
- 6月18日 東区完掘
- 6月20日～30日 東区埋戻しと西区表土剥ぎ
- 6月30日 西区遺構検出写真、遺構掘下げ開始
- 7月 2日 西区完掘
- 7月 7日～8日 西区埋戻し

B区

- 平成20年 9月24日 調査開始、表土剥ぎ
- 10月 2日 遺構検出写真、遺構掘下げ開始
- 10月 7日 完掘
- 10月 8日～9日 埋戻し

第3節 調査組織の構成

調査体制については下記のとおりである。

- 埋蔵文化財センター 所 長 佐 藤 英 一
- 次 長 坂 本 嘉 弘
- 総務課長 宮 永 敬 三
- 調査第一課一般事業担当主幹 小 柳 和 宏
- ＊ 総 貫 俊 一

なお、調査支援業務委託をおこなった九州文化財総合研究所（A区）と（株）埋蔵文化財サポートシステム（B区）の担当は下記のとおりである。

九州文化財総合研究所

調査技師 三ツ又 正 明

調査助手 横山和幸、宮田剛

埋蔵文化財サポートシステム

調査技師 内田賢一

調査助手 手柴智晴

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

久住連山の南斜面に降った雨を集めて東流する大分川は、大分市内の明野丘陵に行く手を阻まれ、北に進路を変え大分平野を作りながら別府湾に注ぐ。遺跡の立地する上野丘陵は、大分川が進路を変えたところに、突き出るように西から延びる。つまり、大分川が上野丘陵を半周するように取り巻きながら別府湾に流れ出るのである。上野丘陵は、高崎山から伸びてくる尾根部の先端に当たり、現大道バイパスの地点で一旦鞍部を作ったのち、上野墓地公園あたりで最高所（標高約80m）となり、緩やかな北向きの斜面を有しながら西に延び、元町石仏のある凝灰岩の断崖をもって終わる。東西はおおよそ1.5km、南北は0.5～0.8kmである。

遺跡のある地点は標高26mで、丘陵の北端に位置し、すぐ北側は地高差12m前後の急崖となり大分平野が広がる。もっとも、古代の段階では未だ大分川の沖積化は進んでおらず、平野の中核をなす旧府内町（江戸期の城下町）は海であった。丘陵北側裾部の発掘調査によれば、一部微高地上には弥生時代以来の遺跡があるので、古代においても丘陵北側の裾部の利用はあったものと考えてよい。

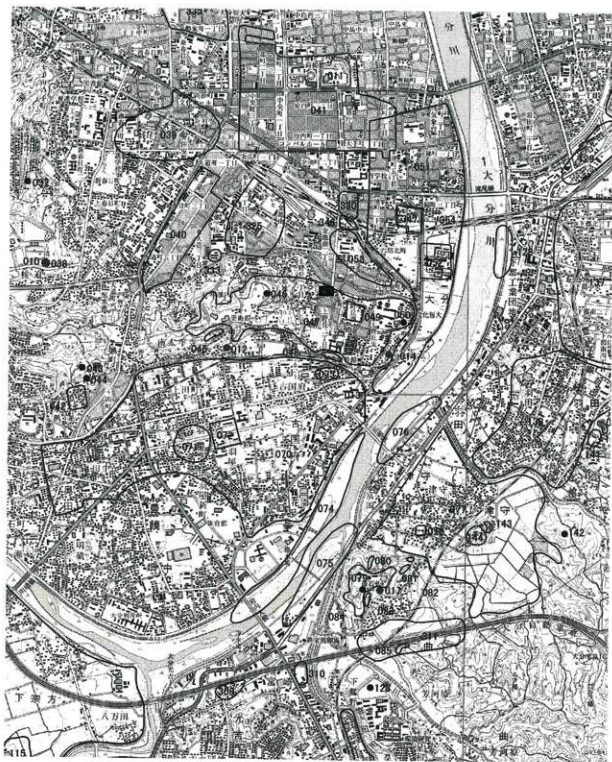
ところで、遺跡のある場所の小字「矢取坂」は、北側裾部から調査区Aと調査区Bの間を登ってくる坂道を指していると考えられる。この坂がいつまで遡るものであるかはわからないが、遺跡の立地と大いに関連している可能性を考慮する必要があるだろう。

第2節 歴史的環境

上野丘陵は豊後国にとって最も重要な地であった。それは流域に沖積地を作りながら上野丘陵を取り巻くように流れる大分川と密接に結びついていたからに他ならない。上野丘陵から大分川を約5km遡ると、左岸丘陵上に豊後国分寺、国分尼寺があり、上野丘陵のすぐ南裾には国府（現「古国府」）があった。海上交通の要地であったに違いない大分川河口部、そして古代の陸路の起点も丘陵南裾にあり、上野丘陵はそのすべてに目が行き届く立地を有していた。丘陵上にも国衙機構の一部があり（高国府）、古代寺院も構えられるなど、枢要地として機能していた。寺院の場所は今回の調査区から谷を隔てた西側にあたり、調査でも古代瓦が出土している。

中世になると、守護大友氏は、国衙機構と重なるように上野丘陵やその周辺地域に足場を築いていった。15世紀には守護館である上野原館を築き、徐々に沖積化の進む大分川河口部に町を作った。戦国末期、島津氏に豊後を蹂躪された時、上野丘陵には宣教師たちが逃げ込んだ「上野原の新しい城」もあった。

近世になり、海岸部を埋め立てて城下町が作られたことによって中核は沖積地に移り、上野丘陵の歴史的意味は薄れていった。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表 上野遺跡群と周辺の遺跡

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
011(指)	府内城跡	近世	053	普賢八幡宮遺跡	弥生	123	芳川原古墳	古墳
012(指)	伽藍石仏	古代	070	古国府遺跡群	弥生・古代ほか	128	大分川河川4遺跡	縄文
013(指)	岩屋寺石仏	古代	071	羽屋園遺跡	古代	143	碓山横穴墓群	古墳
014(指)	元町石仏	古代	072	金剛宝戒寺跡	古代	144	碓山山頂遺跡	弥生
039	東田室遺跡	弥生・江戸	073	岩屋寺遺跡	中世	309	光吉遺跡	近世
040	大道桑里跡	古代・中世	076	大分川河川3遺跡	縄文・弥生	310	宮崎遺跡	近世
041	府内城・城下町	近世	077	津守遺跡	弥生	311	曲遺跡	弥生・中世・近世
043	千人塚	古墳	078	松平忠直津守館跡	近世	325	大道遺跡群	弥生・古墳・近世
044	弘法六古墳	古墳	079	守岡遺跡	弥生・中世	330	金池南遺跡	弥生
047	上野遺跡群	弥生・古代ほか	080	滝尾守岡横穴墓群	古墳	333	東大道遺跡	弥生・古墳
049	上野大友館跡	中世	082	鳥越伽藍石仏	中世	346	上野町遺跡	奈良・平安
050	大臣塚古墳	古墳	084	守岡古墳	古墳	347	大友館跡	中世
051	中世大友府内町跡	中世	085	一の追横穴墓群	古墳			

*番号は遺跡台帳の遺跡番号である。

*番号(指)は、指定文化財番号である。

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

調査は、里道部の調査ができなかったことにより3地区に分断されている。そのため相互の繋がりに今ひとつ明瞭さを欠くが、標高を見ると、A区とB区の間に浅い谷（丘陵裾から登ってくる坂道につながる）があるのがわかる。そのため本来A区とB区は浅い谷により隔てられていた可能性がある。遺構はほぼ古代に限られる。掘立柱建物が5棟、土坑3基が確認された他は、時期不明のピットなどである。

掘立柱建物は、A区とB区の間の浅い谷を挟んで西側に3棟、東側に2棟ある。西側の3棟はいずれも平側を海側に向けているのに対し、東側の1棟は、浅い谷に面するように妻側を海に向けている。

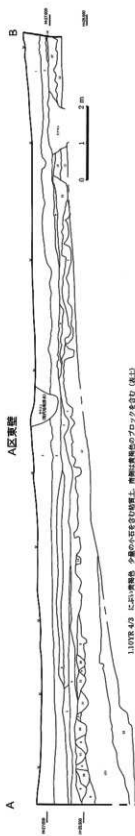
B区では、土坑が第2号掘立柱建物を挟むように掘られており、建物との関連が考えられる。

遺物では、古代瓦が出土しており、谷を隔てた調査区西側にあった古代寺院との関連も考慮される。



第2図 調査区位置図 (S/1,000・上方が北)

※灰色網掛けは計画道路



- 1107R 4/3 土壌腐植土
 2107R 3/1 腐植土
 3107R 3/2 腐植土
 4107R 3/2 腐植土
 5107R 4/1 腐植土
 6107R 2/2 腐植土
 7107R 2/2 腐植土
 8107R 3/2 腐植土
 9107R 3/1 腐植土
 10107R 4/2 腐植土
 11107R 3/2 腐植土
 12107R 2/1 腐植土
 14107R 3/2 腐植土
 15107R 4/1 腐植土
 17107R 3/1 腐植土
 18107R 3/3 腐植土
- 少葉の小葉を含む腐植土、腐植土腐植土のブロックを含む(表土)
 少葉の小葉、上部片を含む腐植土(強く腐葉土)、カタランの腐植土は腐植土ブロックを大量に含む
 少葉の小葉、上部片を含む腐植土(腐植土腐植土)
 少葉の小葉、上部片を含む腐植土(腐植土腐植土)
 少葉の小葉、上部片、カタランを含む腐植土(腐植土腐植土)
 少葉の小葉、上部片、カタランを含む腐植土(腐植土腐植土)
 土壌片、腐葉土腐植土(腐植土腐植土)
 土壌片、腐葉土腐植土(腐植土腐植土)
 土壌片、腐、小葉を含む腐植土(腐植土腐植土)
 土壌片、腐、小葉を含む腐植土(腐植土腐植土)
 土壌片、腐、小葉を含む腐植土(腐植土腐植土)
 少葉の小葉片、腐葉土腐植土(腐葉土腐植土)
 少葉の小葉片、腐葉土腐植土(腐葉土腐植土)
 土壌片、腐葉土腐植土(腐植土腐植土)
 土壌片、腐葉土腐植土(腐植土腐植土)
 土壌片、腐葉土腐植土(腐植土腐植土)
 土壌片、腐葉土腐植土(腐植土腐植土)



- 1 腐植土腐植土
 2 腐植土
 3 腐植土-古代の腐植土
 4 腐植土腐植土
 5 腐植土(ローム土)
 6 ロームブロック多量に含む腐植土(腐植土腐植土)
 7 腐植土
 8 腐植土腐植土
 9 腐植土
 10 腐植土腐植土
 11 ロームブロック少量を含む腐植土

第3図 土層断面図

第2節 A区の遺構と遺物

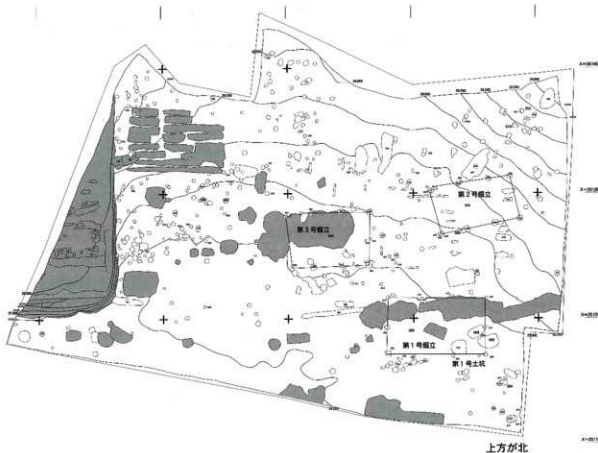
小字に名を残す「矢取坂」から登ってくる道の西側にあたるのがA区である。約1,063㎡の面積を調査した。掘立柱建物3棟と土坑1基の他は、時期の決め手に欠くピット、土坑状の落ち込み、近代以降の掘削になる耕作痕、廃棄土坑等であった。地山は調査区の北東に向けて傾斜しており、調査区内での比高差は2.5mほどある。遺構は、調査区中央よりやや東側に偏って検出されている。このことは、「坂道」との関係があることを想定させる。

第1号掘立柱建物 (s-020)

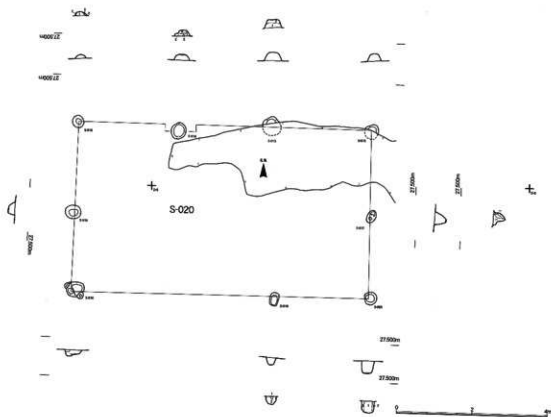
桁行1間、梁行3間、4.8m×7.5mで32.0㎡の面積を有する掘立柱建物跡である。等高線に対してやや角度を持ち、中軸線はN-90°-Eである。柱穴からはフィゴの羽口(第9図11)が出土している。

第2号掘立柱建物 (s-030)

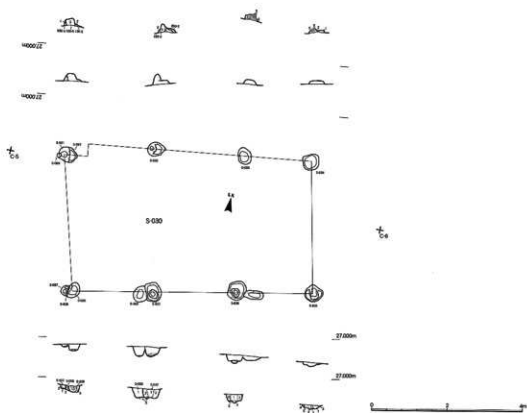
桁行1間、梁行3間、3.7m×6.5mで24.0㎡の面積を有する掘立柱建物跡である。等高線に対してやや角度を持ち、中軸線はN-78°-Eである。柱穴からは遺物の出土はなかった。



第4図 A区遺構配置図 (S=1/300・網掛けは攪乱等)



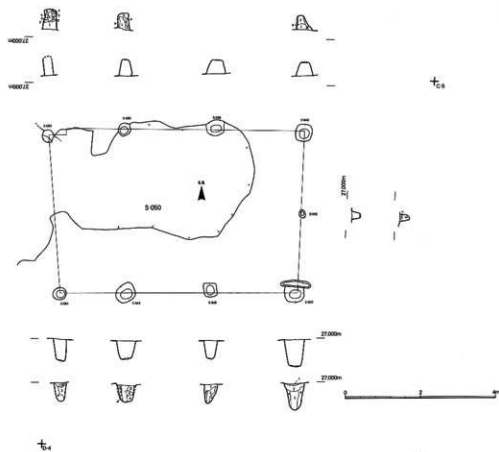
第5图 第1号掘立柱建物 (S=1/100)



第6图 第2号掘立柱建物 (S=1/100)

第3号掘立柱建物 (S-050)

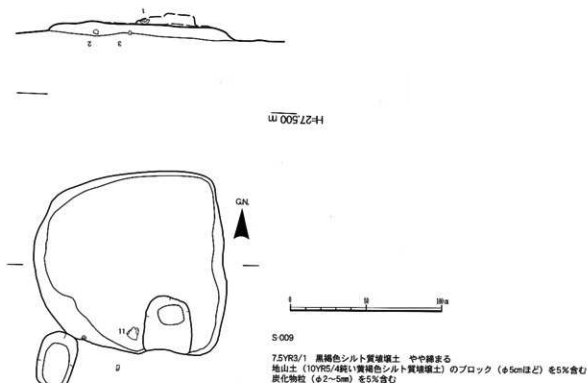
桁行2間、梁行3間、4.2m×6.5mで27.3㎡の面積を有する掘立柱建物跡である。等高線に対してやや角度を持ち、中軸線はN-90°-Eである。柱穴からは遺物の出土はなかった。



第7図 第3号掘立柱建物 (S=1/100)

第1号土坑 (S-009)

第3号掘立柱建物の内部に収まる一辺4.2mの隅丸方形の土坑である。深さは15cmほどしか残っていない。遺物は鉄滓が出土している (第10図23)。

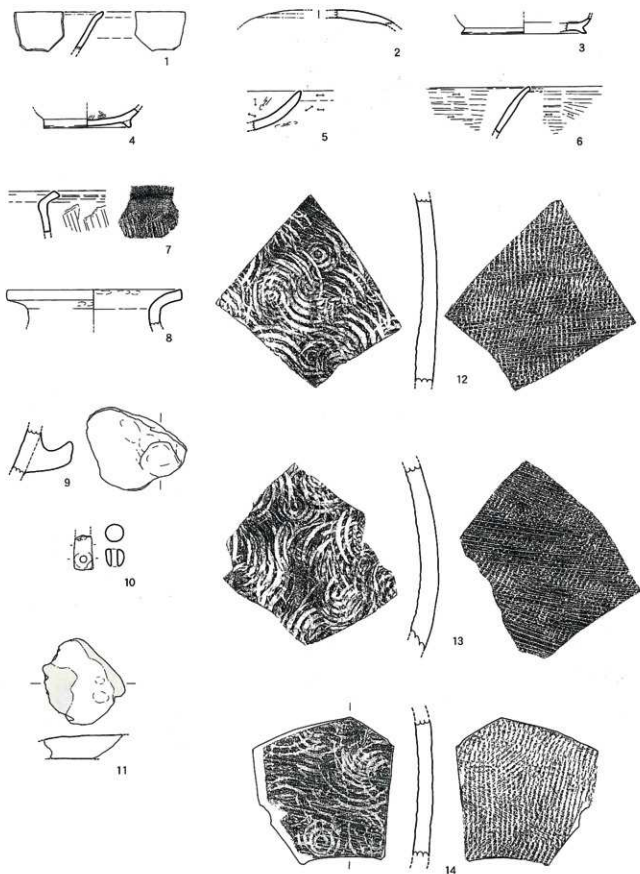


第8図 第1号土坑 (S=1/25)

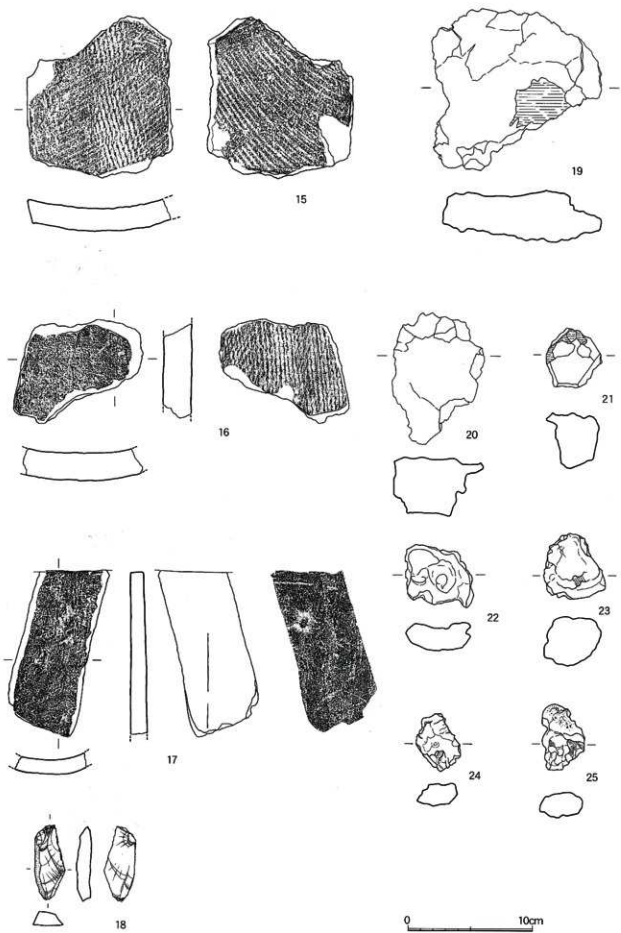
遺物

遺構の他に表土中や、攪乱の中から遺物が出土しているので、併せてここで説明する。

1は白磁の碗で、口縁部が小さく外反する。2と3は須恵器で、2の坏蓋は上面回転ヘラケズリ、3の碗は外に張り出す高台を持つ。4と6は内黒土器で、内外面にミガキを施す。5はミガキを施す坏である。7と8は土師質の甕で、7は外面にハケ目を有する。9は甕の把手である。10は素焼きの棒状土錘。11はフイゴの羽口で、第1号掘立柱建物の柱穴から出土している。12から14は須恵器甕の胴部破片である。15から17は古代瓦。18は使用底のある流紋岩製の薄片。19から25は鉄滓で、碗形滓の一部である。23は第1号土坑出土、19と24はS-017、20と25はS-005、21はS-006、22はS-004の出土で、調査区南東部に集中している。



第9图 A区出土遗物(1) (S=1/3)



第10图 A区出土遗物(2) (S=1/3)

第3節 B区の遺構と遺物

「矢取坂」を登ってきた道の東側にあたる調査区である。東西に里道が通り、その部分は調査できなかった。遺構は掘立柱建物2棟と土坑2基である。地山は調査区西側すなわち坂道側に傾斜しており、小さな谷の存在を窺わせる。

第1号掘立柱建物

桁行2間、梁行3間、5.0m×7.5mで37.5㎡の面積を有する掘立柱建物跡である。等高線に対してほぼ直行し、中軸線はN-85°-Eである。柱穴からは遺物の出土はなかった。

第2号掘立柱建物

桁行1間、梁行3間、4.5m×8.5mで38.3㎡の面積を有する掘立柱建物跡である。等高線に対してやや角度を持ち、中軸線はN-7°-Eである。柱穴からは遺物の出土はなかった。

第1号土坑 (S-01)

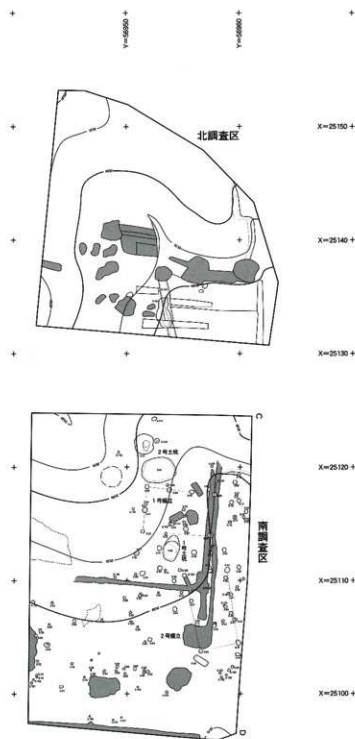
第1号掘立柱建物の北側にある長径2.3m、短径1.4mの楕円形を呈する土坑である。深さは0.2mである。

遺物は第16図26から36である。26から30が土師器の高台付きの椀で、27と30は内黒土器。26は内外面ともミガキが顕著である。31から33は土師器様。31には体部に二カ所内部から穴があけられている。いずれも底部ヘラ切りで、体部にミガキはない。36は、軒平瓦、外面は格子タタキで、瓦当部は唐草文がみられる。

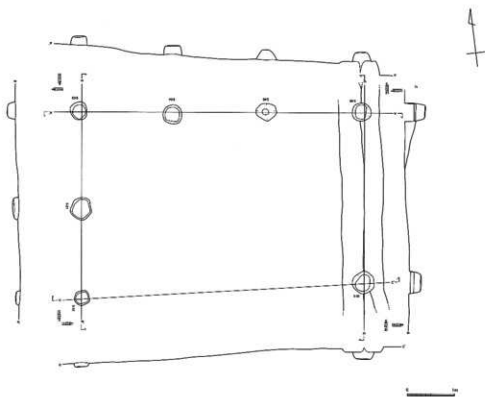
第2号土坑 (S-02)

第1号掘立柱建物の南側にある長径3.0m、短径2.2mの楕円形を呈する土坑である。深さは0.25mである。

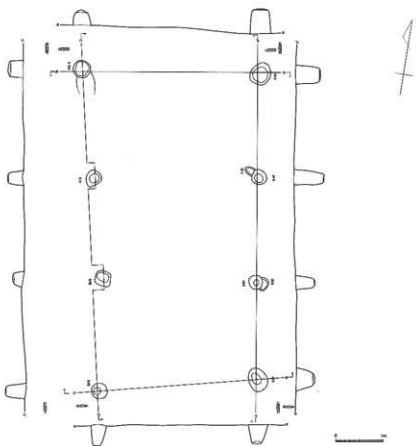
遺物は第17図37から43である。37と38は土師器坏で、38は回転ヘラ切り、37の底部はナデ調整されている。39は椀。40は皿か。41、42はコシキである。



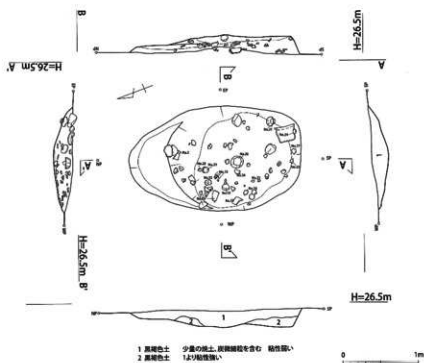
第11図 B区遺構配置図 (S=1/300・網掛けは攪乱)



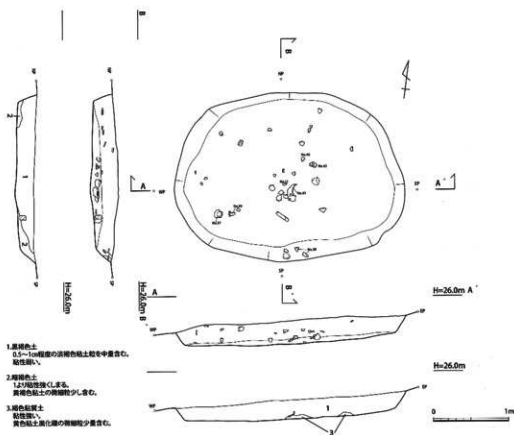
第12图 第1号掘立柱建物 (S=1/80)



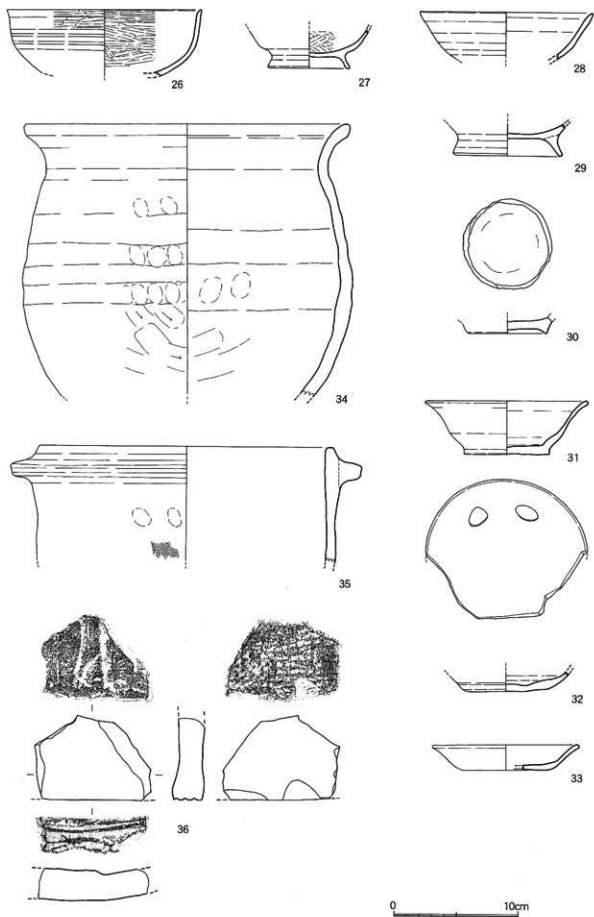
第13图 第2号掘立柱建物 (S=1/80)



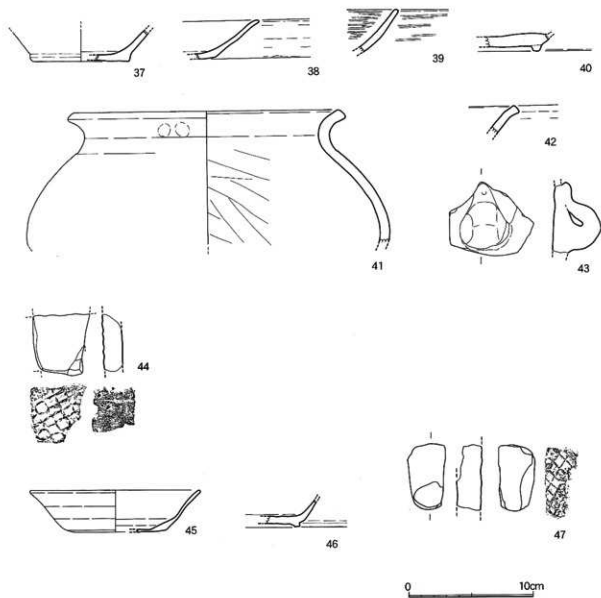
第14図 第1号土坑 (S=1/50)



第15図 第2号土坑 (S=1/50)



第16図 第1号土坑出土遺物 (S=1/3)



第17図 B区2号土坑その他の出土遺物 (S=1/3)

第4章 総括

上野遺跡群は、大分川河口部に広がる大分平野と大分川によって作られた羽屋～古国府地区の沖積地に挟まれた丘陵上に広く展開する遺跡群である。弥生時代から古墳時代にかけても大分平野周辺地域の中では重要な地区であるが、古代になると益々その重要性が増す地域となる。上野丘陵から見下ろす古国府地区から羽屋地区にかけて国府が設置され、豊後国の政治の中心となったばかりではなく、上野丘陵上には現存する金剛宝戒寺の前身寺院が建立されるなど、政祭を司る中枢域が形成されていたのである。

今回調査を行った矢取坂地区は、南の古国府側ではなく海を望む北側に面する場所である。そこに、丘陵下から登ってくる坂道がとりついている。この坂道と遺跡形成の要因が関連するのかはもう少し広い範囲の調査結果を考慮する必要があるが、検出された掘立柱建物群が古代のものだとしても、柱穴が小さく、官衙的要素は無い。

出土遺物の様相からは土師器坏における底部を円盤状に肥厚させる特徴や（31、37など）、土師器碗の高台が長く伸びる点（29）、黒色土器はA類しかなく、高台が高く開いている点（27など）、土師器坏の底部の切り離しに糸切りが見られない点などを評価すると、10世紀後半を中心とする時期と考えられる。A区のフイゴ羽口と碗形滓の出土は、共伴資料が無く時期を特定出来なかったものの、おそらく状況から他の遺構と等しい時期にこの地で鍛冶が行われていたことを示唆するものである。

第2表 遺物観察表

遺物番号	図版番号	地区名	出土地点	種別	法量		調整、文様など	焼成	胎土	色調	備考
					口径	高さ					
01	第9図	A区	西区 E-3 S-097	白磁碗			回転模ナデ	良好	緑織	白色	
02	第9図	AK	東区 D-5 S-069	須磨器杯蓋			回転ヘラケズリ ナデ	良好	石灰多い	灰色	
03	第9図	A区	東区 S065 6/17 D-4	須磨器碗	高台付		内外面模ナデ	精緻		暗灰色	
04	第9図	A区	東区 S004 6/13 D6	土師器碗	高台付 6.8		内面へう磨き 外面指ヨコナデ	良好	長石・石灰少ない	内面淡褐色 外面黒色	内黒土器
05	第9図	AK	東区 S048 6/18 B-6	土師器杯			内外面へう磨き	良好	角閃石・長石少ない	淡黄色	
06	第9図	AK	東区 S071 6/18 D-5	土師器碗			内外面ヘラケズリ	良好	角閃石・長石少ない	淡黄灰色 黒色	内黒土器
07	第9図	AK	西区 B-3 S-100 7/1	土師器碗			指ナデ 指ヨコナデ ハケメ	良好	角閃石・長石少ない	褐色	
08	第9図	AK	東区 S006 D-11 6/16	土師器碗	(13.55)		内外面指ナデ 指ヨコナデ 口縁指圧痕	良好	長石・石灰少ない	淡褐色	
09	第9図	AK	東区 D-5 S009 6/13	土師器碗			内面指ナデ 取っ手部分指圧痕	良好	角閃石・長石・赤色砂粒少ない	淡黄褐色	
10	第9図	A区	東区 D-5 S-001	棒状土師	直径 1.3			良好	角閃石・石灰少ない	明黄褐色	
11	第9図	AK	東区 S009 P-1 6/13	フニの口			指ナデ	良好	角閃石・長石少ない	淡黄褐色	
12	第9図	A区	東区 B-5 S-055 6/17	須磨器蓋			同心円状の当て具 格子のかき目	精緻		灰黄色	
13	第9図	A区	東区 B-5 S-073 6/20	須磨器蓋			同心円状の当て具 格子のかき目	精緻		灰黄色	
14	第9図	A区	西区 C-3 S-098	須磨器蓋			同心円状の当て具	良好	石灰多い	灰黄色	
26	第16図	B区	S-01	土師器碗	15.2		内面ヘラミガキ 外面風流、 ヨコナデ (口ロク)	良好	角閃石微塵わずか、赤色砂子 1.0mm少し、白色砂子微塵 ヨコナデ	内面黒褐色 外面にふいば褐色	内黒土器
27	第16図	B区	S-01	土師器碗	直径 (6.4)		内面ヘラミガキ 外面ヨコナデ、 ナデ、高台貼り付け	良好	角閃石1.0mm少し、石灰1.0mm わずか、赤色砂子1.0mm少し、 白色砂子微塵わずか	内面黒褐色 外面にふいば褐色	内黒土器
28	第16図	B区	S-01	土師器杯	(13.6)		内外面ヨコナデ	良好	角閃石1.0mm少し、石灰1.0mm 少し	にふいば黄褐色	
29	第16図	B区	S-01	土師器碗	直径 8.0		内面ナデ 外面ナデ、ヨコナデ、 高台貼り付け	良好	角閃石1.0mm少し、石灰1.0mm 少し、白色砂子微塵、赤色 砂子1.0mm少し	黄褐色	
30	第16図	B区	BK S-01	土師器碗	直径		指ヨコナデ、ナデ	良好	長石少し	褐色	
31	第16図	B区	S-01	土師器杯	13.0	4.2	内面回転ナデ、指ナデ 外面回転 ナデ 底面回転へう切り後枚状痕	良好	長石多い、角閃石少し	黄褐色	口縁部内外、 風流にスス付着
32	第16図	B区	S-01	土師器杯	直径 6.8		内面ヨコナデ、指ナデ 外面ヨコ ナデ、へう切り	良好	角閃石1.0mm少し、石灰1.0mm 少し、白色砂子微塵わずか	淡黄褐色	
33	第16図	B区	S-01	土師器杯		1.9	内外面回転ナデ 底面回転へう 切り後ナデ	良好	長石多い、角閃石少し、 赤色砂粒多い	茶褐色	
34	第16図	B区	S-01	土師器碗			内面指圧痕、上具状ナデ、ヨコナデ 外面指圧痕、ヘラケズリ、ヨコナデ	良好	長石微塵多い、角閃石0.5~ 1.5mm多い、石灰1.0mm大少し、 赤色砂粒多い	黒茶褐色	外面にスス付着
35	第16図	B区	S-01	茶釜			内面ナデ 外面指圧痕、タテハ、 ヨコナデ	良好	長石1.0mm大多い、石灰1.0~ 1.5mm大少し、赤色砂粒多い	黄褐色	
37	第17図	B区	S-02	土師器杯	直径 (7.8)		内面ヨコナデ、ナデ 外面ヨコ ナデ 底面ナデ	良好	長石多い、角閃石少し、 赤色砂粒少し	黒茶褐色	
38	第17図	B区	S-02	土師器杯		2.9	内面ヨコナデ、ナデ 外面ヨコ ナデ 底面回転へう切り	良好	長石多い、角閃石0.5~1.0 mm多い、赤色砂粒多い	褐色	
39	第17図	B区	S-02	土師器碗			内面全面を丁寧にヘラミガキ 外面ヨコ方ヘラミガキ	良好	長石多い、角閃石少し	内面黄色 外面暗赤褐色	
40	第17図	B区	S-02	土師器皿			内面ヨコナデ、ナデ 外面ヨコナデ	良好	長石多い、石灰1.0mm大1ヶ ・赤色砂粒少し	暗黄褐色	
41	第17図	B区	S-02	土師器蓋	(11A)	10.6	内面ノ具状のナデ→ヨコナデ 外面ヨコナデ	良好	長石多い、角閃石0.5~2.5 mm多い、赤色砂粒多い	外面スス付着 内面茶褐色	
42	第17図	B区	S-02	土師器碗			内外面ヨコナデ	良好	長石多い、角閃石少し	褐色	
43	第17図	B区	S-02	瓶			内面指圧痕、ナデ 外面指圧痕、 ナデ	良好	長石多い、角閃石少し、 石灰1.0~5.0mm大多い	暗黄褐色	
45	第17図	B区	S-13	土師器杯	(13.5)	3.35	内面ヨコナデ、指ナデ 外面 ヨコナデ、へう切り	良好	角閃石1.0mm少し、石灰1.0 mmわずか、白色砂子微塵少し	褐色	内面灰色 外面黒灰色
46	第17図	B区	S-36	須磨器碗			内外面回転ナデ	良好			

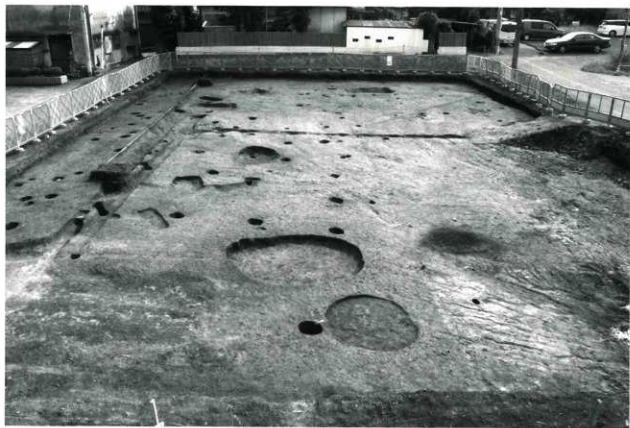
写真図版



A区西側完掘状況（南から）



A区東側完掘状況（南から）



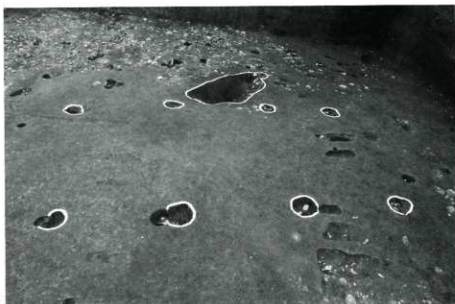
B区南調査区完掘状況（北から）



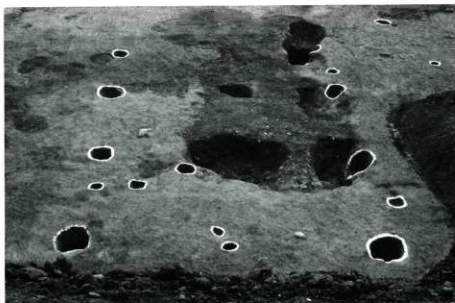
B区北調査区完掘状況（西から）



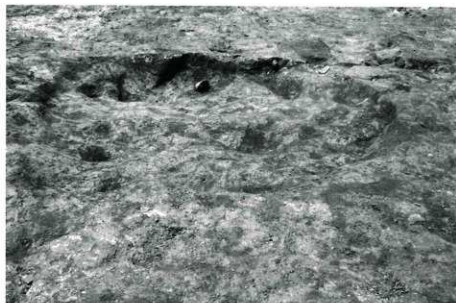
A区第1号掘立柱建物



A区第2号掘立柱建物



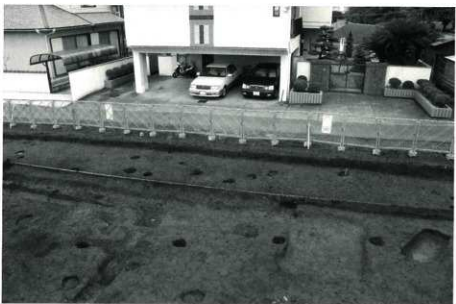
A区第3号掘立柱建物



A区第1号土坑



B区第1号掘立柱建物



B区第2号掘立柱建物



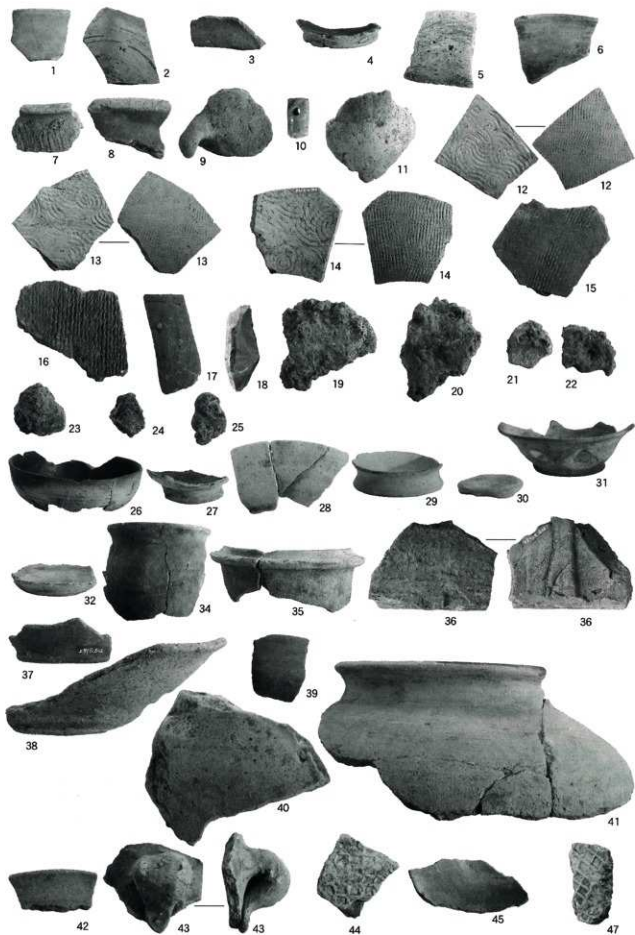
B区第1号土坑



B区第2号土坑
堆积状况



B区第2号土坑



報告書抄録

ふりがな	うえのいせきぐん やとりざちかく							
書名	上野遺跡群～矢取坂地区							
副書名	県立単位制高校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	-							
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第53集							
編著者名	小柳和宏							
編集機関	大分県教育委員会							
所在地	〒870-0021 大分市大字中判田ビワノ門1977番地 大分県教育庁埋蔵文化財センター							
発行年月日	2010年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
うえのいせきぐん 上野遺跡群	おおいとしうまのがおか 大分市上野ヶ丘	201	201047	33 13 31	131 36 39	H20.6 ~ 7 H20.9 ~ 10	1,887.8	学校建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上野遺跡群	集落等	古代	掘立柱建物、土坑等		土師器、鉄滓等			
要約	今回調査を行ったのは、上野丘陵から下る「矢取坂」の下り口に位置する場所である。そこでは掘立柱建物5棟が確認された。同時期と思われる土坑からの出土遺物によると、その時期は10世紀である。							

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第53集

—県立単位制高校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

上野遺跡群 ～矢取板地区～

平成22年3月31日

発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113 大分市大字中判田1977番地
TEL 097-597-5675 FAX 097-597-5680
URL <http://maizoubunka-c.oita-ed.jp/>

印刷所 尾花印刷有限公司
〒877-0026 大分県日田市田島本町8-8
TEL (0973) 23-0123